



コメント

ゲイ・ローリー

早稲田大学

早稲田大学教授。専門分野は日本文学。日本人女性の伝記著作、翻訳を数多く手がけている。代表的著書は、与謝野晶子の『源氏物語』への傾倒を中心に綴った伝記『Yosano Akiko and The Tale of Genji』(ミシガン大学日本研究センター、2000年)、伝記翻訳『Autobiography of a Geisha』(コロンビア大学出版、2005年、原著：増田小夜『芸者：苦闘の半生涯』1957年)、江戸初頭の宮廷での密通スキャンダル猪熊事件に巻き込まれた中院局の生涯をたどる著作『An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan』(コロンビア大学出版、2013年)。柳沢吉保の側室、正親町町子による日記文学『松陰日記』の翻訳書を近刊予定。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、第2波フェミニズムの高揚する時代に成年に達した世代にとって刺激的な存在でした。1949年の『第二の性』の出版とその後の30以上の言語への翻訳は、第2波フェミニズムを誘発しました。多分、これが、私がいつボーヴォワールの人生と著作について知ったかをはっきり言えない理由でしょう。オーストラリアの都市近郊の女子校で学んでいた時ではないと思います。その学校では、フランス人女性教師からフランス語を学び、当時どこの女子校でもそうであったように、その先生のことば、ただ「マダム」と呼んでいました。授業で読んだ本は、フランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』でした。ボーヴォワールを最初に読んだのは、日本でだと思います。交換留学生として津田塾大学にいた1982年の夏休みに、『娘時代』を読みました。つい先日、ぼろぼろになったその本を何年振りかで取り出し、その本の英語訳をしたのが、日本で30年以上に渡って英語を教えていたイギリスの詩人、ジェイムズ・カーカップ(1918生～2009没)であったことを知りました！

日本の知識人たちにとって、ボーヴォワールがどれほど重要であったかを認識するようになったのは、その数年後、日本女子大学で、再びフランス語の勉強を始めたときでした。初級の文法を学んだ学期の後に与えられたのは、日本語による解説付きの『娘時代』のダイジェスト版でした。教師は、1968年代終わりの学生運動を経験している日本人男性でした。パリでのことか東京だったか、またはその両方か、もう思い出せません。教室でノンポリの女子学生を前に、眠たげなやる気のなさを振り払わせようと、ドラマチックな闘争の経験と、彼や彼の友達が目指していた自由な生き方について、時折語ってくれました。「僕たちはサルトルとボーヴォワールだ！」大きな声で鼓舞します。「愛のために生き、愛のために死ぬ、常識にとらわれるな！」

ジュリア・ブロック先生の今日のご報告とその他の論文から²、私のフランス語の先生の経験がどのようなものであったか、サルトルとボーヴォワールのパートナーシップのイメージが左派知識人にどう受け入

¹ カーカップ英訳版は初め、1959年 André Deutsch and Weidenfield & Nicholson 社刊。その後 1963年 Penguin Books 刊。カーカップの業績については、ガーディアン紙に掲載された、Glyn Pursglove and Alan Brownjohn による追悼記事参照。https://www.theguardian.com/books/2009/may/16/obituary (accessed 19 May 2019)。

² Julia C. Bullock, “Fantasy as Methodology: Simone de Beauvoir and Postwar Japanese Feminism,” *U.S.-Japan Women's Journal* no. 36 (2009): 73-91; “From ‘Dutiful Daughters’ to ‘Coeds Ruining the Nation’: Reception of Simone de Beauvoir’s *The Second Sex* in Early Postwar Japan,” *Gender and History* 30.1 (2018): 271-285.

れられていたのかを十分に理解することができます。それは、ジャン・バーズレイ先生の発表で示されたとおり、同じ時代に、明仁皇太子と美智子妃を手本とした家庭第一主義の結婚という理想のアンチテーゼなのです。

皇室制度と保守主義に切っても切れないつながりがあることを考えると(実際のところどの世襲君主制でもそうです)、現在の皇族が日本国憲法の革新的な平和主義に徹底して忠実なのは、注目に値することでしょう。政治的発言を禁じられている立場ではありますが、1978年に14人のA級戦犯が合祀されて以来、靖国神社への参拝を取りやめたという決定は、多くを語っています(1975年の昭和天皇の参拝が、皇族による最後の靖国神社参拝)。

さて、数年が経ち、早稲田大学国際教養学部で、日本の女性文学についての授業を担当するようになりました。学生の共通言語は英語です。すべての教材は英語で、クラス内での討論も英語です。授業の準備をしているとき、研究室の棚に、ボーヴォワールのエッセイ「女性と知的創造」があるのを見つけ、とても嬉しくなりました。ボーヴォワールが1966年にサルトルと一緒に来日した際の講演原稿の英語訳です³。トリル・モイが編纂した『French Feminist Thought』に収録されているものです。改めてそれを目にし、大学院で学んでいた頃のことが思い出されました。「フレンチ・フェミニズム」が大ブームだった時代です。

「女性と知的創造」は、1966年9月22日に日比谷公会堂で行われた講演です。この中でボーヴォワールは、いまだに私たちを悩ませている、女性芸術家や女性作家についての疑問への回答を提示しています。女性作家に焦点をあてたコース授業の最初の討論の口火を切るのに最適な題材です。ボーヴォワールが答えようとした一番の疑問は、なぜ「政治・芸術・哲学などのあらゆる部門において、その数量からいっても質からいっても、女性の業績は男性に比べてはるかに劣って」いるのかでした。(39頁:脚注3参照、以下同)

今日私たちが思うところはさておき、ボーヴォワールはこれを、彼女の論争の起点として有効だと考えたようです。彼女が並べた例は広範に及びます。ヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』(1929年)、オランダの画家ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(1853生～1890没)、スイスの彫刻家アルベルト・ジャコメッティ(1901生～1966没)、そして日本の紫式部。紫式部については「日本の偉大な作家」、そして『源氏物語』を「おそらく女性の筆による世界最高の文学作品」とであると述べました(58頁)⁴。

ボーヴォワールはまず、「この二十年間、男性と女性が同等なチャンスをもったと主張するのはまったくの嘘だということですよ」と論じます(42頁)。女性は職業を持つようになったかもしれない、しかしその数はわずかで収入も男性に比べてとても少なく、家庭内の重労働に縛り付けられているなど、私たちにもなじみ深い話です。それゆえ、「女性の職業上の凡庸さは多くの事情に原因するものであって、それは女性の本性からくるものではなく、女性の生活状況からきている」のです(46頁)。

³ “Women and Creativity”のRoisin Mallaghanによる英訳はToril Moi編『French Feminist Thought: A Reader』(Oxford: Blackwell, 1987), pp. 17-31に収録されている。このほかMarybeth Timmermanによる英訳はMargaret A. Simons and Marybeth Timmerman編Simone de Beauvoir著『Feminist Writings』(Champaign: University of Illinois Press, 2015), pp. 155-169に収録。Ursula Tiddによる“Introduction” pp. 149-154は後者の翻訳に関し細かい説明を提供している。本稿引用の日本語訳文は、シモーヌ・ド・ボーヴォワール(朝吹登水子・朝吹三吉訳)『女性と知的創造』(1967年、人文書院)から引用。添付の参照頁は同書のもの。

⁴ 『源氏物語』のRené Sieffert (1923生～2004没)による完訳版が刊行されたのは1977～1985年なので、ボーヴォワールは、1925～1933年に刊行されたArthur Waleyによる英訳版や、1928年に刊行された、山田菊(1897生～1975没)によるArthur Waley英訳の第1巻(「桐壺」から「葵」までを所収)からのフランス語訳を読んでいたと思われる。

次に、「創造における限界を説明するための女性の内面的な条件は、今まで私がお話しした外部状況よりもっとずっと重要なのです」と続けます(52 頁)。「すべてが男の子を野心へとかり立てますが、女の子を野心へとかり立てるものは何にもありません」とボーヴォワールは言います(54 頁)。ここで『紫式部日記』の有名な一節を例示します。「紫式部の兄が漢文を学んでいたとき、彼は漢字がなかなか覚えられなかったのですが、彼女はたやすく覚えたのです。そして・・・父が、残念なことだ、おまえが男の子ではなくて」と言ったのです(58 頁)⁵。

ボーヴォワールは実社会についてもこう述べます。「この社会は男性支配の社会ですから、重要な決断、大きな責任、重大な仕事はいやがうえにも男性を高め」ます。この言葉から半世紀が経ちますが、社会がどれだけ変わっていないかを私たちは知っています。そしてこう続けます。「女性はこの社会の埒外に生きています。…女性は容易に観察者となり、これは著述を望む人にとって特権的な位置です」。だからこそ、「女性による優れた重要な作品が多数あるのです」(59～60 頁)。その例として、紫式部の『源氏物語』、ラ・ファイエット夫人の『クレーヴの奥方』が挙げられました⁶。

しかし、ボーヴォワールはこうも述べます。「二人とも当時の社会と妥協してい」ます。「偉大な作品というものは世界を完全に討議に付す作品で」あるべきですが、「ところが女性はそれをしません。女性は批判し、細部において意義を申し立てます。しかし世界を完全に討議に付すには、この世界にたいして深い責任を感じなければなりません」(61～62 頁)。

少なくとも『源氏物語』については、ボーヴォワールが意味していることはこうでしょう。紫式部は宮廷における権力関係について巧妙に批判し、彼女自身が作り出した主人公の自負すらあざけているにも関わらず、「世界を討議に付」してはいない。つまり、ヴァン・ゴッホやジャコメッティのように危険な生き方をしていないと言いたいのでしょう。もちろん私は、このことが紫式部の作品の価値を下げているというボーヴォワールの意見には賛成いたしません。

講演の最後に、ボーヴォワールは知的創造というものについて語ります。「多くの人びとは創造ということについてまったく誤った考えをもってい」ます。彼女は、「人びとはそれを自然の分泌だと空想して、芸術家や作家は牛が乳を出すように作品を産むと思うのです。」といいます。でも、知的創造というものは、もっと複雑なものなのだと論じます。「創造とは・・・社会全体から条件づけられているのです」。女性たちは伝統的規範に縛られていて、彼女たちの状況は男性たちとは全く異なるため、これまで、女性たちの業績が男性たちによるものよりも劣っているのは理解できると⁷(66～67 頁)。

ボーヴォワールは、女性たちを奮起させるメッセージで講演を締めくくります。

⁵ 英訳は Richard Bowring, trans., *The Diary of Lady Murasaki* (Harmondsworth: Penguin Classics, 1996), pp. 57-58 参照。原文は「この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞き習ひつつ、かの人は遅う読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞ聡くはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞつねに嘆かれはべりし。」

⁶ ラ・ファイエット伯爵夫人マリー＝マドレーヌ・ピオシュ・ド・ラ・ヴェルニュ(1634 生～1693 没)の『クレーヴの奥方』(1678 年)は、アンリ 2 世(1519 生～1559 没、在位 1547～1559)の宮廷を舞台にした歴史小説。女性主人公を除くほとんどの登場人物は実在の人物で、宮廷内での逸話も実際に起きた出来事。英訳書は 1950 年刊の Nancy Mitford 訳と、それを Leonard Tancock が改訂したもの(Harmondsworth: Penguin Classics, 1978)がある。

⁷ ジャーメイン・グリアは『*The Obstacle Race: The Fortunes of Women Painters and Their Work*』(London: Secker and Warburg, 1979. Rpt. London: Tauris Parke, 2001)で同様の指摘をしている。「女性のレオナルドや女性のティツィアーノ、女性のブッサンは確かに存在していない。しかしそれは、女性には子宮があるからとか、子どもが産めるからとか、脳が小さいからとか、活力に欠けているとか、官能的でないからなのではない。その理由は、単に、常軌を逸した決意と箍の外れた性的衝動と神経症回路へのエネルギー投入を伴う壊れた自我が、偉大な芸術家を生み出すわけではないということだ。」p. 327.

私は女性たちに・・・知っていただきたいのです。なぜなら彼女たちはなしとげるチャンスをもたなかったのであり、ですから、それ以上できなかったのです。もし彼女たちがチャンスを得るために戦うとすれば、それは同時に彼女たちの自己完遂への戦いでもあるのです(68 頁)。

この要約から、ボーヴォワールの 1966 年日本における講演が、大学の授業での討論の題材に相応しいことはご理解いただけたと思います。体験的な例を挙げると、どのクラスでも学生の誰かが指摘するのは、女性たちの成功を阻み抑える状況の存在は、恵まれない環境の男性たちやマイノリティグループに所属する人々にとっても問題であるということです。ジェンダーに限らず、社会階層や「インターセクショナルリティ」の問題があるということです。

ボーヴォワールの議論に同意できない点はあるとはいえ、特にひとりで世界に立ち向かった男性の天才的芸術家を理想化している点ですが、ボーヴォワールの言葉が、私たちの人生や、ブロック先生がお話くださったように、ボーヴォワールの話を直接聞いたり、会ったり、本を読んだり、それを翻訳した人たちの人生のなかに生き続けていると考えると、勇気が湧いてきます。

謝辞:本シンポジウムへの参加の機会をくださったジャン・バーズレイ先生に感謝申し上げます。ジャンが教室の内外で発している前向きなエネルギーは、皆がよく知るところです。何をするにも一緒に楽しく取り組んでくれるのです。ジュリア・ブロック先生の、日本におけるボーヴォワールの影響についての研究も興味深く読ませていただき、北村文先生、大橋史恵先生、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の皆さんにお会いできたことをうれしく思っています。ありがとうございました。